

実践報告 (Report)

中学校の生徒会活動を中心とした異年齢交流 についての実践報告

Report on Cross-Age interaction activities by a student
council in a Japanese Junior High School

村瀬 悟*
MURASE, Satoru*

キーワード：生徒会活動，異年齢集団，中学校

Key words：Student Council, Cross Age Interacting Activities, Junior High School in Japan

1. 実践目標と意義

本稿は、中学校の生徒会活動を中心として、学区内の小学校や地域など中学校の垣根を越えた多様な異年齢交流活動を推進することで、学校の垣根を越えた人と人とのつながりの大切さを実感し、それぞれの活動を通して生徒に多様な資質・能力を育むができたことを紹介する実践記録である。

『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』には、「生徒会活動は、校内の活動はもとより、校外にも目を向けて、自主的、実践的に活動することに教育的意義がある。そこで必要に応じて校内の活動のみでなく、他校との相互交流を図ったり、地域社会との連携を深めたりするなど、校外での活動への広がりを図るようにすることが重要である。」とある¹⁾。また、『子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」』では異年齢交流には社会性を育む一定の効果があり²⁾、『魅力ある学校づくり調査研究事業』報告では異年齢交流、特に中学校区を一体とした小中学校間での交流による絆づくりを推奨している³⁾。

このように、一つの学校内での交流に留まることなく、学校外や地域へと広がっていくことで、現代の子どもたちが直面していくことが予想される社会のグローバル化、技術革新や社会構造の変化など、予測困難な将来に向けて多様な他者と協働しながら、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、課題を解決し、社会の形成者としての成長を図ることが重要であり、これからの学校教育の大きな役割となる。

一方で、学校行事や生徒会活動など、特別活動の活動時間が授業時間数の確保や昨今の働き方改革の影響により、学校行事等の精選や内容の見直し、準備の簡素化、地域行事との合同開催などが進められてきている⁴⁾。このことにより、各学校では削減による教員の負担軽減と教育効果の確保との狭間で議論が重ねられている。いかに働き方改革として教員の負担が軽減されたとしても、そこで生活する児童生徒にとって

* みよし市立三好中学校

本論文は椋山女学園大学教育学部紀要の投稿・執筆規程2に基づき査読を受けた（2020年11月10日受付；2020年12月25日受理）

学校へ行きたいと感じ、充実した学校生活が送れるもの、すなわち児童生徒の健やかな成長が図られる場所でなければ学校の存在意義が問われてしまう。これに対し、『学校の働き方フォーラム』では各学校の取り組み事例として「小中連携でガイドブックの作成」や「地域学校協働本部を活用した実践」などがあげられており⁵⁾、働き方改革下であっても小中学校間や地域との連携の運用の有効性を示している。

また、小中学校間や地域との連携、異年齢交流についての研究では、信夫・山本らによれば「交流対象が異年齢、同学年にかかわらず、行事活動が少なからず「自己有用感」の獲得に影響を与えている」ことを実証しているが⁶⁾、こうした「自己有用感の獲得」が検証され学校行事等での異年齢交流が自己有用感を獲得する効果について示してはいるものの、学校生活をとおして多様な異年齢交流活動がどのような役割を担い、機能性をもっているかについての先行研究は管見の限り数少ない。

限られた学校教育の活動時間の中でより効果的に、諸活動が相互にその効果を発揮するためには、各学校ごとに行ってきた教育活動について異校種間、地域との連携をより適切に計画し、諸活動の教育効果とそれぞれが果たしている機能性について研究を進める必要がある。

本稿では、こうした学校の垣根を越えた多様な異年齢交流活動の果たしている役割や機能性について明らかにする研究の間隙を埋めるとともに、活動の形態や交流の対象、規模等の異なる交流活動の共通点や相違点に触れながら、みよし市立三好中学校の実践について具体的に紹介することを目的とする。なお、三好中学校は愛知県の郊外にある古くからの住宅地にある生徒数約550人の中規模校で、生徒は比較的落ち着いている学校である。

2. 交流活動の実践事例

平成30年度までに中学校区で実施されている活動の一覧を図1に示す。本校校区では、学校内外いずれも学校行事規模の取組から各委員会活動レベルまで実に多くの種類の交流活動が行われている。これは学力や運動能力、リーダーシップなど、能力が高い人が活躍できるような格差をなくし、一人一人の個性や興味関心に応じて参加でき、誰もが（より多くの生徒が）活躍する機会を得ることができるようするためであり、多様な分野での交流を推進し活躍の場を提供もしくは保証するといった共通理解が教員全体に示されているために実施することができていたことである⁷⁾。

この交流活動を以下のように分類し、紹介する。

(1) 小学校内での異年齢交流

中学校区には3つの小学校があり、各学校ごとに様々な活動が行われているが、各小学校に共通して1年生と6年生がペアになり、清掃や給食のお手伝いを行っている。また、特別活動だけでなく地域探検などの学習活動でも交流する学校も見られる。



図1 A中学校区における交流活動

(2) 中学校内での異年齢交流

本校では生徒会活動によって異年齢交流活動が運営されることが多い。体育祭・文化祭・3年生を送る会といった主要行事はすべて実行委員会により生徒が主体的に運営し、組織・活動はすべて複数の学年が混在した異年齢集団によって行われている。また、運営ではなく競技や合唱などの練習では1～3年生が縦割り団を結成し、年間を通して縦のつながりを意識し、互いに協力し合っている。

生徒会活動の基本となる生徒議会・生徒総会では、各学年を組み合わせた座席で、意図的に異年齢が関わるようになっている。

(3) 小学校との交流活動

本中学校区には3つの小学校があるが、それぞれの小学校との交流活動を進めている。特別活動の中では、吹奏楽部・バスケットボール部などによる部活動交流、文化祭・合唱コンクールの関連活動としての合唱交流、生徒会企画として中学生が小学校に訪問して開催する中学校説明会などがあり、総合的な学習の一環として職場体験学習の小学校教員体験（2年生の希望者）や、母校へ感謝の気持ちを清掃活動で行う社会貢献活動（3年生担当生徒）などがある。

(4) 卒業生との交流活動

異年齢交流を重ねてきた卒業生も交流活動へ参加している。進路学習の一環として開催される「卒業生に学ぶ会」は、中学卒業直前に事前アンケートで卒業後に講師として参加したいかどうかの意思確認を行い、翌年度に改めて講師依頼をすることで卒

業生が参加している。講師となった卒業生は数回の打ち合わせ準備を行った後、夏休み出校日を開催日として中学3年生に高校生活を紹介する講座を開催している。

また、継続されている活動ではないが、令和2年度には大学生が卒業生に学ぶ会に参加した高校生と中学3年生に向けて、大学生活を紹介する冊子と動画配信形式による（本来は大学生が中学校で講座を開催する予定だったが、コロナ感染症予防の観点からこの形式を採択した）「みよちゅー大学」という大学生生活紹介資料の作成を行った。

(5) 地域との交流活動

「魅力ある学校づくり調査研究事業」を契機に本格化した異年齢・小中連携交流活動の最中、例えば『理想の学校』とはどんな学校なのかなど、学校に関わるすべての人々が同じ感覚・価値観を共有して活動するために、互いの年齢や立場に関わらず自由に語り合える場所として「子どもと大人の学校会議」がつけられた。参加者や会議のテーマ、開催についてはその都度必要に応じて決められているが、およそ年間1～2回程度の開催、参加者は小学生～大学生、保護者、小中学校教員、民生（児童）委員、小学校の校長や大学教授が参加することもある。

また、地域との交流では、委員会活動の一環として提案された（清掃委員会提案・ボランティア募集による参加）地域交流美化活動が行われている。

3. 機能性の視点から見た異年齢交流活動の分類

異年齢交流活動の一つ一つの取り組みが一人一人の自己有用感や、参加した上級生の自尊感情を高める効果をねらいとして行われているが、それぞれの活動が持つ役割は異なる。これらを教育活動上の機能性の視点から図2のように分類する。

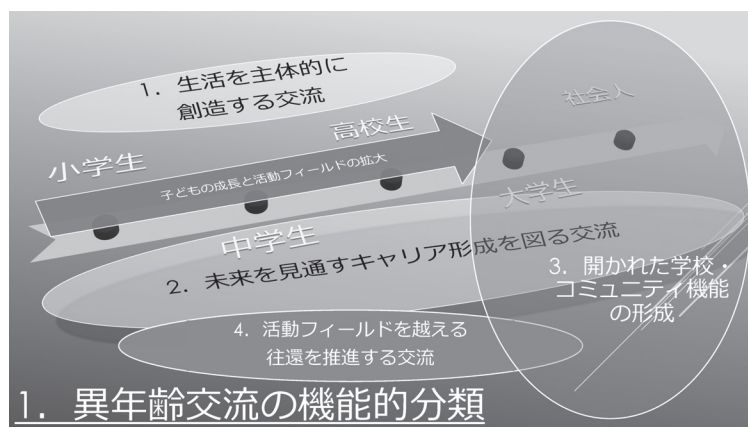


図2 異年齢交流活動の機能による分類

〈機能性による分類〉

① 生活を主体的に創造する交流

(例 あいさつ運動、地域清掃交流、合唱交流など)

特別活動、とりわけ学校行事や生徒会活動のように生徒の主体性により展開される活動。これらの活動はあえて交流をしなくても実施可能だが、生徒が自分自身で活動範囲や対象を拡げたり、創造的に提案し実行する力を育む機能をもつ。

② 未来を見通すキャリア形成を図る交流

(例 中学校説明会、卒業生に学ぶ会(事前アンケートによる参加依頼)など)

小中連携を推進するときにいわれる「中1ギャップ」の解消を目的とすることがある。小学生から見ると、中学校は学校生活の場所が変わるだけでなく定期テストや部活動、制服など様々な面で小学校までの生活と大きく異なり、先の見えない未来に不安を抱くことが多い。こうした物理的・社会的な環境の変化が不要なストレスや不安感を抱き、登校意欲の低下などを招く可能性が生まれる。(同一学校内であっても学年が変わる年度末、年度初めにも同様の不安感が生まれるため、異学年による交流を推進することで不安感の減少を図るとともに、上級生の自己有用感や自尊感情を高める取組が進められている。)

学校間を越える交流活動は、このような環境の変わる未来の様子を直接関わりあうことで知ることができる機会となる。自分の進むであろう未来に見通しを持つことで不安感を減少させるとともに、上級生の姿から「ああなりたい」「進学したらこうやって過ごしていきたい、だから……」という憧れや将来に希望を持つキャリア形成につながる機能をもつ。

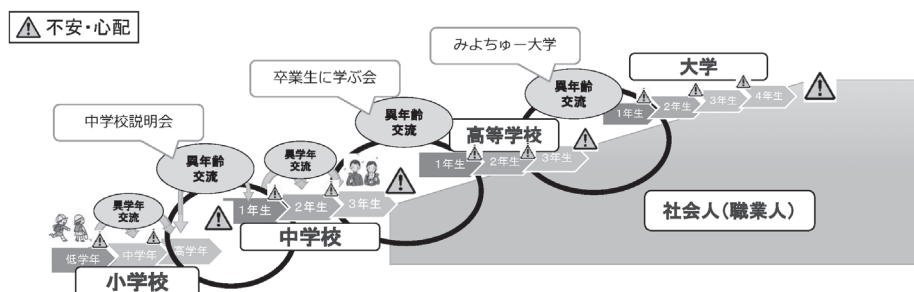


図3 学年間、校種間に見られる不安感と交流活動の例

③ 開かれた学校・コミュニティ機能の形成を図る交流

(例 子どもと大人の学校会議)

三好中学校は生徒会活動の一環として学校行事を生徒自身が実行委員会を組織して運営する生徒の主体性を重視した学校である。この方針は特別活動の活動計画に図4のように位置づけており、自分たちの「生活づくり(学級活動)」から「学校づくり」へ、そして「学校区づくり」へと活動範囲を拡げながら最終的に「地域づくり」へと展開し、特別活動の大きな目標である「社会の形成者となる生徒の育成」を目指し、

活動範囲の展開とそれぞれの活動における役割を明確にしている。

図中にある「子どもと大人の学校会議」は、多様な世代の参加により学校生活をはじめとして、より良い地域社会を目指して話し合う場となり、ここで得られた知見をそれぞれの活動に反映させていく役割を担っている。

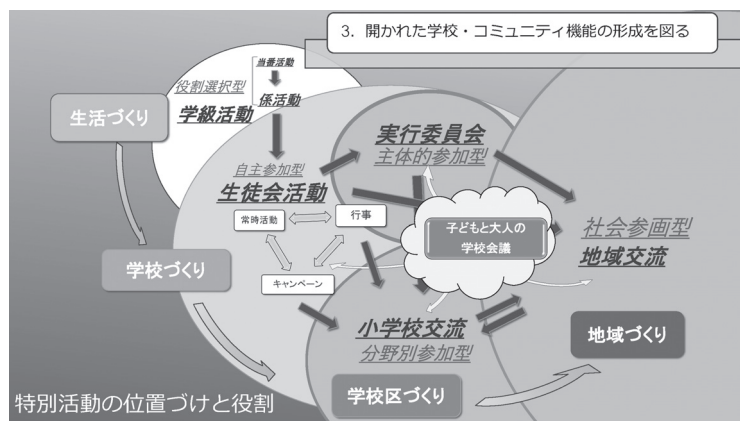


図4 特別活動の位置づけと役割

※三好中学校における特別活動の位置づけと役割 補足

- (ア) 【役割選択型】学級活動…仲間のために学級内での自分の活動をつくる係活動等。
- (イ) 【自主参加型】生徒会活動…前後期を通して全校生徒が委員会委員となり、生徒会活動を自主的に参加することを目指す。
- (ウ) 【主体的参加型】実行委員会…主な学校行事などで生徒の手によって企画され、希望者が参加して運営される活動。希望者が参加するためより主体的に活動することができる。
- (エ) 【分野別参加型】小学校交流…部活動や委員会活動など分野が多岐にわたることで、多様な生徒が参加し、活躍する機会が得られる。
- (オ) 【社会参画型】地域交流…生徒会役員提案「地域版ハッピープロジェクト（感謝の気持ちをメッセージカードに記入して投函 box へ入れる。これを担当生徒が回収してその相手へメッセージを届ける活動の地域版）」のように、地域住民とともに生活を豊かにする活動を行う。事前の打合せや安全面などの準備が必要となる。

④ 活動フィールド（学習、生活などの場）を越える、学びの往還を推進する交流
（例 小学校との学習交流会）

学校生活は主に授業など学習と日常生活や行事などの場面（「活動フィールド」と呼ぶこととする）があり、生徒一人一人の関心や活躍の場は異なる。それぞれの場面で充実し成長した力は指導要領にも示されるように、学習で得た力を生活の場面で発揮するなど、異なる場面でも発揮されることが望ましい。交流活動が特別活動領域に留まった実践になるのではなく、学習で身につけた能力を発揮する場面となることも交流活動の重要な機能として位置づけている。

4. 実行委員会による異年齢交流活動

(1) 生徒会活動と実行委員会

中学校で行われている異年齢交流を運営する実行委員会は、生徒会活動の一環として行われることが多い。例えば生徒会役員提案による学校行事の実行委員会運営については先行研究による実践報告⁸⁾にあるように、生徒主体による企画・運営の活動は、希望する生徒が参加し学校生活をより良くするだけでなく、自分自身の資質・能力を生かしたり、向上させる取組になっている。本校のこうした交流活動の多くが生徒会・委員会活動であることはこうしたねらいからくるものである。

(2) 実行委員会の運営による異年齢交流活動の事例「学習交流会」

本校では様々な交流活動が展開されているが、その活動の多くは同様の進め方で進められている。本項では令和元年度初めて実施された学習交流会を例に紹介する。なお、この活動の元になる活動「学習会」は本学区にある小学校（全校児童368名（令和元年度））のうち1校の取組であり、全校児童が毎年夏休みに計5日間小学校区の3つの児童館施設を利用し、家から近い児童館へ希望する児童（全学年）が参加して小学校の先生から学習指導を受けるものである。今年度の参加児童は1日あたり150名前後（1施設あたり50名程度）であった。学習交流会はこの学習会へ協力する形で行われた。

① 発案から実行委員会結成

令和元年度体育祭終了後（5月末）、学区内にある小学校から依頼を受ける。「体育祭を成功に導いた中学校の生徒会の力をぜひ借りたい。毎年夏休みに小学校で行っている学習会を良いものにしたいから協力して欲しい」このような内容を生徒会役員が直接小学校の先生から依頼を受ける場面を設けている。この後、活動にかかる期間や労力等をふまえ、各委員会（生活、福祉、学年運営委員会等10種の委員会がある）の委員長へ活動の協力を依頼した。

その後2年生学年運営委員会が依頼を引き受け、1年学年運営委員会と協力して実行委員会組織による「学習交流会」を企画、生徒議会へ提案を行った。（本校ではすべての委員会活動が生徒議会（生徒総会）の承認を受けて実施することができる仕組みになっている。）

生徒議会で承認後、1、2年生全体に向けて、学年運営委員会より学習交流会実行委員会の募集を行った。今回参加した生徒は47名（2年生22名、1年生25名、うち学年運営委員担当者は各学年3名ずつ）であった。

② 準備活動（教え方学習会・当日用いる問題用紙の作成）

学習交流会当日に向けて参加者の担当場所（3つの児童館）と学年（高学年、中学年、下学年）を決めた後、2つの準備を行った。

1つめは、小学生に教えるための学習プリントの作成である。生徒の弟や妹、友達

などが持っている小学校の学習ドリルなどを持ち寄り、一人1枚以上の学習プリントを作成した。準備時間も限られているため、今回は漢字と計算を中心に作成し、完成したものを当日使用することにした。

2つめは、小学生への教え方講座の開催である。小学校勤務経験のある本校教員が講師として参加し、小学生へ学習を教えるときのポイントについて学んだ。主な内容は、小学生との関わり方（言葉遣いや視線の高さなど）や、飽きさせないコツ、よくある問題の間違い方と解決方法の例などであった。

③ 当日の様子

今回の活動は5日間ある学習会のうち、2日間の参加となった。1日目の始めには中学生も小学生も互いに緊張していてぎこちない様子がみられたが、小学生が学習プリントを解いていくうちに質問やアドバイスが交わされるようになっていった。活動時間は2時間程度の短いものであったが、それぞれが作成した学習プリントを利用して生徒一人あたり2～4名の児童に教える形となった。2日間とも活動終了後には打合せを行い、説明する時に難しかったことや終始笑顔で接していたことなど振り返りを行った。

④ 事後の活動

当日を終え、実行委員会の振り返りを行った。「コミュニケーションがとれるか不安だったけどうまく話せて良かったです」「小学生のためにプリントを作ることが初めての経験でとても良かったです」「自分も学べた、またやってみたいです」「小学生と一緒に楽しく学べたので良かったです」「小学校の頃に見ていた後輩が大きくなっている姿が見られて嬉しかったです」「楽しかった、嬉しかった、良かったと言う声が多くて、これを続けていって欲しいと思いました」といった声が挙がった。

また、小学生からは感想やお礼のメッセージが届けられ、実行委員全員で閲覧した後、校内の生徒会掲示板へ貼られ全校生徒へ紹介した。まとめとして、全校集会で活動の様子について発表した。活動を全校へ紹介する大切な取組である。

⑤ ワークシートより、活動前後の変化

行事等の実行委員会で利用するワークシート「ライフスキルアップカード」では、自分自身の成長の変化の様子を7つの項目で自己分析し、活動を通して意識的に向上させようという項目がある。

参加者全体の活動前後の変化の様子を図5に示す。活動前後の変化量については、7つの項目のうち6つの項目で明らかな違いが見られた（**、 $p<0.01$ ）。また、変化量の最も大きかったものは「アイデア提供」「他学年との関わり」であった。この活動が生徒の成長の場の一つとなっていることが伺える。

⑥ 事後アンケート結果より（活動前の期待、活動の意義、自由記述より）

活動後には事後アンケートを行った。主な質問事項と回答は以下のようになった。（N=41）

（ア）参加を決めたとき、どんなことを期待しましたか（図6、上位3項目を回答）

R1. 学習交流実行委員会 全体

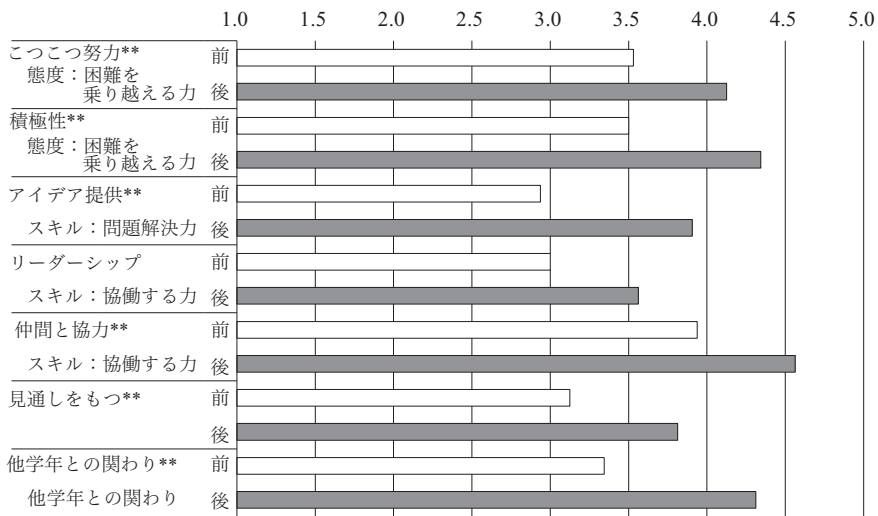


図5 ライフスキルアップカードの活動前後の様子

1. 参加を決めたとき、どんなことを期待しましたか

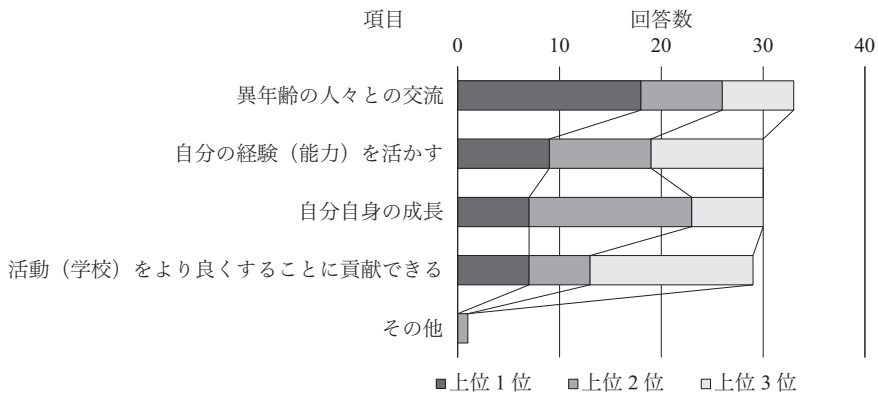


図6 事後アンケートの様子（活動への期待）

上位1～3位の合計では「異年齢の人々との交流」が最も多く、上位1位の回答数も同様であった。上位2位では「自分自身の成長」の回答が多い。全体の回答からどの項目についても一定の期待する様子が見られた。

(イ) 活動を通して成長した・身についたと思うこと（図7、上位3項目を回答）

上位3項目の合計を見ると、「人と関わる力」「主体的に行動する力」の回答が多くなっている。交流活動に希望者が参加する実行委員会の特性が結果に表れているものと推察される。次いで「知識（経験）をいかす力」が高いことも「学習」の交流活動であることが関連している可能性も考えられる。

2. 活動を通して成長した・身についたと思うこと

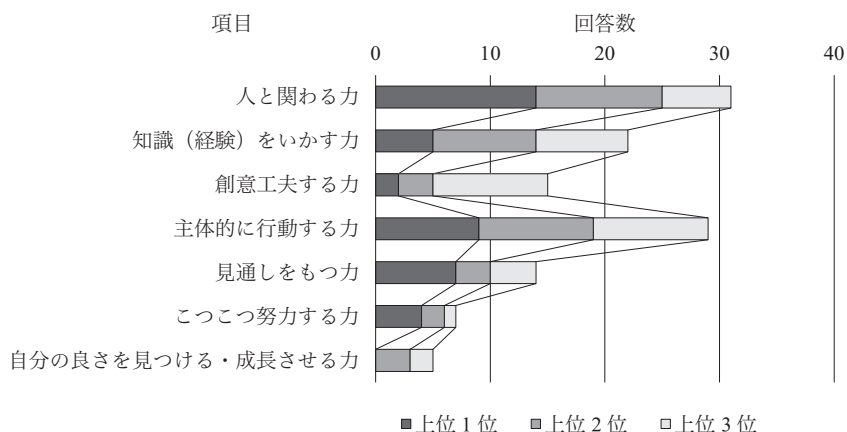


図7 事後アンケートの様子（活動を通して成長したこと）

(ウ) その他

「今回の活動の様子を教えてください」項目では、4件法で（はい）と答えた割合が「楽しかった（95%）」「充実していた（85%）」「大変だった（32%）」、（多い）と答えた割合が「異学年との交流（73%）」であった。大変だったという回答に比べて楽しかった・充実していた回答が顕著に高く、今回の活動の有効性が示唆される。

また、「この活動の今後についてどう思いますか」項目では、「続けた方がよい（95%）」、「あってもよい」割合を含めると100%が継続を願っている。「今回の活動に参加して良かったと思うことは何ですか」（自由記述）では、「小学生から学べることがあったから参加して良かった」「小学生がわからないところを教えてあげるのが良かった（それで喜んでくれて、達成感があった）」「自分が運営したということで、自分の実力を知ることができた」等、参加者がそれぞれの体験に基づいた良さを感じている。

5. 異年齢交流活動の比較

令和元年度から2年度にかけて行われた実行委員会による交流活動のうち、事後アンケートを実施した活動の形態や活動期間等を表1にまとめた。これらの活動を比較すると、活動形態や機能性、活動期間、参加者、交流対象等、様々な共通点や相違点があり、一様ではないことがわかる。これらの活動は同じ生徒が複数種類参加したり、同じ活動にこだわって参加する生徒もいる。

表1 実行委員会による代表的な交流活動の一覧

参加者数 担当教員	活動名	交流の機能性 活動形態	準備期間	参加者 交流対象	回答数
47名 7名	学習交流会	<4. 学びの往還の推進> 学区内の小学生へ学習プリントを作成し、勉強を教える。	7月～8月準備 8月22日実施	(参加) 中学1, 2年生 (対象) 学区内小学校1校 小学1～6年生	41名
76名 9名	中学校説明会	<2. 未来を見通すキャリア形成> 中学校へ進学する3つの小学校へ訪問し、6年生を対象に中学校生活を紹介する。	11月生徒議会提案 11月中旬～12月中旬準備活動 12月下旬活動	(参加) 中学1, 2年生 (対象) 学区内小学校3校 小学6年生	76名
160名 25名	3年生を送る会	<校内異年齢交流活動> 卒業を控える3年生に向けて、1, 2年生が3年生を送る会実行委員会を組織し、行事を行う。	12月組織づくり 1月～2月準備活動 2月下旬実施	(参加) 中学1, 2年生 (対象) 中学3年生	134名
36名 4名	「花き」を届けようプロジェクト	<1. 主体的生活の創造> コロナ禍で需要が減少した愛知県の花きを受け取り、地域施設へ届ける。	5月末参加者募集 6月準備活動 7月上旬実施	(参加) 中学3年生 (対象) 地域公共施設職員 児童館、公民館等	36名

(1) 「中学校説明会」と「学習交流会」との比較

令和元年度に実施された中学校説明会と先に挙げた学習交流会とを比較し、相違点、共通点について挙げる。

「参加を決めた時、どんなことを期待しましたか」について図8に示す。

上位1位の回答数では「異年齢の人々との交流」が最も多いが、上位1～3位の合計および上位2位の回答数では「自分自身の成長」が最も多い。また、「活動（学校）をより良くすることに貢献できる」では上位1位の回答数が特に少ない。学習交流会とは異なった期待をしていることが伺える。

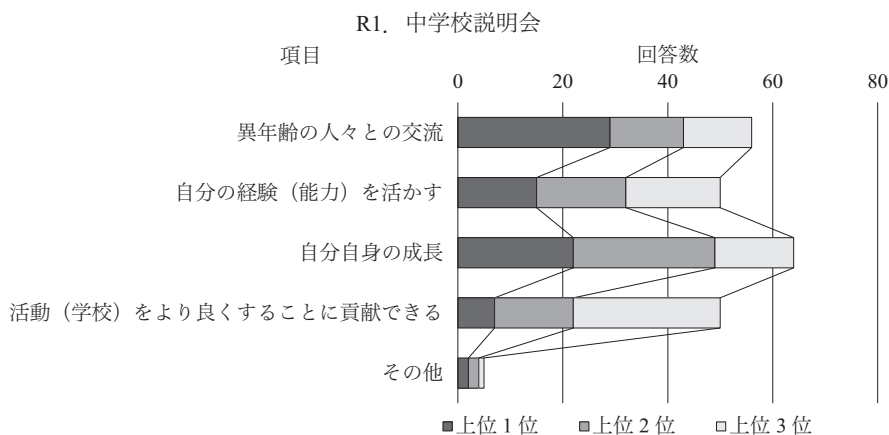


図8 「参加を決めた時、どんなことを期待しましたか」

次に「活動を通して成長した・身についたと思うこと」を図9に示す。

上位1～3位の合計では「人と関わる力」は学習交流会と同様に回答数が多いが、次に多いのは「見通しをもつ力」であるが、学習交流会では「主体的に行動する力」であった。

これらのアンケート結果ではこのように幾つかの相違点を見ることができた。

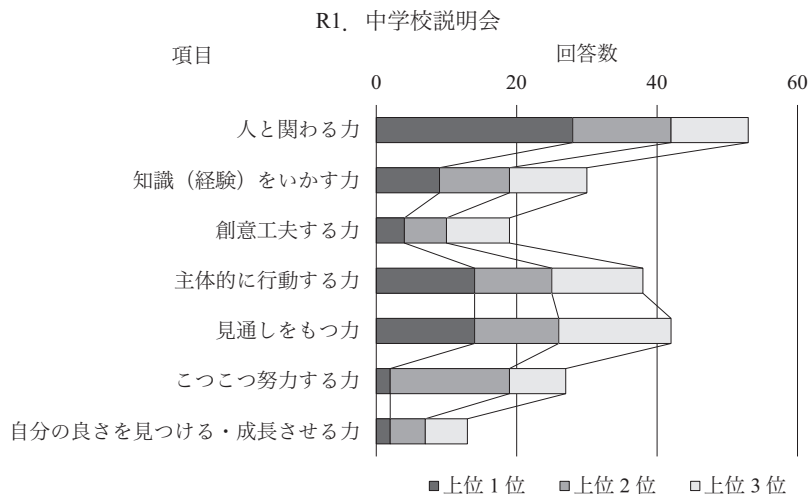


図9 「活動を通して成長した・身についたと思うこと」

一方で、「今回の活動の様子を教えてください」項目では4件法で（はい）と答えた割合が「楽しかった（91%）」「充実していた（73%）」「大変だった（43%）」を示し、「この活動の今後についてどう思いますか」項目では、「続けた方が良い（99%）」と回答する等、活動の充実感については学習交流と同様に高い値を示し共通点として考えることができる。

（自由記述）では、「小学生の笑顔などが見られたこと。なぜなら、じぶんたちでつくってきたことで笑顔になってもらい嬉しかったから」「今の小学6年生を見ることによって、自分たちが成長したこと、また成長し直そうとできるから」など、自分たちで創り上げることや児童の笑顔などに関して学習交流会と共通する記述が見られた。また、「6年生と仲を深め、不安を解消できたこと。なぜなら、不安で入学するより、ずっと安心できるし、楽しみだと思えるから」といった、中学校説明会に見られる小学生にとって不安な中学校生活を伝える記述、いわば未来の見通しを提供する重要性を感じさせる意見がみられた。図9の「見通しをもつ力」の回答割合の高さとの関連性についても今後検討していきたい。

6. 本研究のまとめと今後の課題

本研究では多様な異年齢交流について、活動量が増大する負担感の軽減を図り、より効果的で適切に実践するために、機能性の視点からそれぞれの学校が必要とする交流活動を取捨選択する考え方を実践事例から提案した。

またこうした異年齢交流も教員が枠組みを用意し、その中で子ども同士が関われば効果があるのではなく、その動機や過程に生徒自身が自分たちの問題であり、やってみたいという意欲が根底にあることで活動の価値付けや効果を高めていくことができ

る。本稿では「学習交流会」を事例に挙げることで、その過程及び事後アンケートから参加を決めた時の期待や自身の成長の様子を示した。

さらに、「学習交流会」と「中学校説明会」のアンケート結果を比較することで、同じ小学生を対象とした活動でも活動のねらいや形態が異なることで、参加する生徒の実行委員会活動に対する期待や成長する分野に相違や共通点がみられることが示唆された。

一方で次のような課題が挙げられる。第一に、学校や地域など組織間の調整の難しさである。交流活動を進めたくても担当となる教員が過剰負担になってしまっは良い実践は行えない。小中連携を推進する多くの学校区ではコーディネーター担当をそれぞれの学校に設置し、学校間の連携をサポートしている。地域との連携についても同様である。校内での校務分掌に位置づける必要があるため、導入を進める際にはその効果と活動量の共通理解が重要となる。第二に教員への共通理解である。本校では異年齢交流が始まって6年が経とうとしているが、交流活動は大変であり、なくても良いのではないかと、活動の縮小などの意見も増えてきている。大人の視点からは学習活動が滞りなく進み生徒が落ち着いて学校生活を送ることができれば問題はないように思うのかも知れない。しかし、それだけでは生徒集団が社会の形成者になることは難しく、偶発的にそうした経験をした子どもにのみその道が開かれるのかも知れない。意図的に子ども一人一人の個性が発揮できる、活躍できる場所を提供できることが異年齢交流活動の大きな優位性である。教員にとっての必要性という視点ではなく、子どもの視点から交流活動の価値を共通理解して取り組むことが重要である。第三に、諸活動の検証の推進である。特別活動領域の活動は人と人との関わりそのものであり、子どもの成長は実に多くの要素が複雑に影響し合っている。そのため、子どもの成長の場となっているこれらの活動の効果を検証することが困難であり、それ故に行事の必要性を安易に問われたり、教育活動の中でも削減の対象となりやすい側面がある。異年齢交流活動の「機能性」の検証についても同様に今後の課題であるが、生徒の成長に直接関わる教員以外の教員にいかにもその効果を示すかが重要であり、活動を適切に精査することにも繋がるだろう。

中学校説明会では次のような記述がある。「自分自身も2年前にこの会で安心して中学校へ来れたし、6年生も少しは安心したと思う」「私も6年生の時に聞いて楽しそうだなと思ったし、不安もなくなったから」。年齢の異なる子ども同士がこうして子どもの手によって少し先の未来を創造していく。この姿がやがて社会の形成者の自覚を持った大人となることを想像する。異年齢交流活動が学校教育の基盤となるよう、今後も研究を進めていきたい。

謝 辞

本研究にご協力いただきました三好中学校特別活動指導部の皆さま、生徒の皆さん

に心より御礼申し上げます。また、本論文をまとめるにあたり、山田真紀教授（梶山女学園大学）をはじめ、日本特別活動学会特別研究プロジェクトA「未来研」のメンバーに有益な助言をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

■参考文献・註

- 1) 文部科学省「中学校学習指導要領解説 特別活動編」平成29年告示版 p. 83
- 2) 国立教育政策研究所（平成23年）「子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」―活動実施の考え方から教師用活動案まで―」p. 4
- 3) 国立教育政策研究所（平成29年）「第Ⅲ期 魅力ある学校づくり調査研究事業（平成26～27年度）報告書」p. 7
- 4) 文部科学省「令和元年度 教育委員会における学校の働き方改革のための取り組み状況調査【結果概要】」では、都道府県・政令市は8割以上、市区町村では約6割の教育委員会において行事等の精選や内容の見直し、準備の簡素化等が図られている。p. 33
- 5) 文部科学省（令和2年）「学校における働き方改革」
- 6) 信夫辰規，山本奨，大谷哲弘，佐藤進（2018）「学校生活における異年齢集団活動が自己有用感へ与える影響」岩手大学大学院教育学研究科研究年報 第2巻（2018.3）125-134
- 7) 令和2年度は世界的なコロナ感染症の拡大による休校措置や感染予防ガイドラインにより、多くの交流活動が中止もしくはオンライン等への変更を余儀なくされている。
- 8) 村瀬悟（2019）「生徒会活動による実行委員会を中心とした中学校の学校行事の取組についての実践報告」梶山女学園大学教育学部紀要13：1-12